伝説番号:012

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

法道仙人の鉢

空飛ぶ鉢と米俵

梶原の大銀杏

不思議な玉から育った銀杏

伝説　法道仙人の鉢
　　空飛ぶ鉢と米俵
　　梶原の大銀杏
　　不思議な玉から育った銀杏

紀行　神出鬼没　～謎の法道仙人～
- 法道仙人
- 法華山一乗寺
- 投松
- 法道仙人の手形石
- 米塚堂
- 鴨神社と梶原の大イチョウ

関連情報　用語解説
　　参考書籍
　　所在地リスト

兵庫県立歴史博物館ネットミュージアム
ひょうご歴史ステーション

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

法道仙人の鉢
空飛ぶ鉢と米俵

法道仙人（ほうどうせんにん）は、インドの人です。修行を積んで徳の高い仙人となり、お釈迦様（おしゃかさま）が法華経（ほけきょう）を説いた、霊鷲山（りょうじゅせん）という尊い山で暮らしていましたが、あるとき、雲に乗ってはるばる日本までやってきたそうです。

法道仙人が雲の上からながめておりますと、はるか下の方に八つに分かれた尾根（おね）と、谷間から五色の光がさす山が見えます。これは仏様の霊地（れいち）にちがいないと考えた仙人は、この山に住んで、法華経を読む日を過ごすようになりました。これが、法華山一乗寺（ほっけさんいちじょうじ）のはじまりだということです。

法道仙人は不思議な術が使えました。空っぽの鉢（はち）を、自由自在に飛ばすことができるのです。仙人は、いつも山に座ってお経を読みながら、鉢を飛ばして人々にお供え物を入れてもらうのでした。

仙人の鉢がやってくると、人々はわれ先にいろいろなお供え物を鉢に入れます。すると鉢はすうっと空を飛んで、仙人の元へと帰ってゆくのでした。高砂（たかさご）の生石神社（おうしこじんじゃ）の大神も、その鉢を招いては石の上に置き、お供え物をささげたといいます。

こうして仙人は、多くの人からしたわれ、仏の教えを広めてゆきました。

あるとき――それは大化（たいか）元年のことだったといいます――、瀬戸内（せとうち）の海を航海していた一そうの船に、仙人の鉢が飛んできました。けれどもこの船に積んであった米は、税として集められた米だったのです。

「これは、税として都へもってゆく米なのです。私が勝手に、差し上げるわけにはゆきません。」

藤井という名の船頭がそう言うと、鉢は空っぽのまま飛び去ってゆきました。ところが、その鉢に続くように、船に積んである米俵が、次々と飛んでゆくではありませんか。船頭はびっくりして、必死にあとを追いかけました。

鉢と米俵は、まるで雁（かり）の群れのように空を飛んで、法華山までやってきました。あとを追いかけてきた船頭は、息を切らせて法道仙人の庵（いおり）にかけつけると、わけを話して、米俵を返してくれるようにたのみました。

法道仙人は笑って許し、もう一度米俵を飛ばして船に戻してやりました。ところがこのとき、どうしたわけか一俵だけが途中で落ちてしまいました。米俵が堕（お）ちたというので、そこは「米堕村（よねだむら）」と呼ばれるようになったそうです。

大化５（６４９）年、都の孝徳天皇（こうとくてんのう）が病気になったとき、天皇はこの不思議な話を思い出して、ぜひともこの病を治してもらいたいと考えました。都へ呼ばれた法道仙人は、みごとに天皇の病気を治してみせました。そしてその力におどろく朝廷（ちょうてい）の人々に、仏の尊さを説いたのでした。

すっかり感心した天皇は、法道仙人のために、法華山に大きなお寺を建てました。これが現在の法華山一乗寺のはじまりです。その後も長い間、法道仙人は法華山で仏法を説き続けましたが、あるとき雲に乗って、ひょうぜんとインドへ帰っていったということです。

梶原の大銀杏
不思議な玉から育った銀杏

丹波（たんば）には、法道仙人（ほうどうせんにん）のこんな話が伝わっています。

今から１２００年ほど昔の話、法道仙人というえらいお坊さんが、仏教を広めるためにあちこちを旅していました。丹波国の、市島の梶原にやって来たときの話です。

仙人がお祈りをしていると、ひとりの童子が白い玉をもってあらわれました。
「私は、ここに住んでいますが、この玉を授ける者を待っていました。今日、やっとその方に会えて、こんなにうれしいことはありません。どうかこの玉を、ここにうめてください。」
そういうと、童子は、西の方へ消えてゆきました。

法道仙人は「これは、鴨（かも）の大神のお告げにちがいない」と、さっそく村人を集めて、今の出来事を話し、お経を唱えながら玉をうめました。
「ここは、鴨の大神がおられるところにちがいありません。どうかこの地をいつまでもお守りしてください。」
法道仙人は、そんなふうにたのむと、また、教えを広める旅に出てゆきました。

その後、玉をうめた場所からは、イチョウの木が芽を出し、幹のなかほどから、太い根をのばしてどんどん育ってゆきました。村人たちは、仙人の教え通り、この木を大切に守り育てたということです。

それから７００年も後、丹波の黒井城（くろいじょう）が明智光秀（あけちみつひで）に攻め落とされたときのことです。

黒井城の家老、荻野丹後（おぎのたんご）は、奥方と生まれたばかりの赤ん坊を連れて、落ち延びました。しかし、奥方は乳の出が少なくなり、赤ん坊は日に日に弱ってゆきました。

「家来を戦いで死なせ、我が子までなくしては、何のために生きているのかわからない。」

荻野丹後は、近くの酒梨（さかなし）のお地蔵様に、一心にいのりました。

おいのりを始めて２１日目の夜、夢にお地蔵様が現れてこう言いました。

「私のそばにあるイチョウは、梶原の大イチョウと兄弟だ。根をけずって湯で温めて飲めば、乳がよく出るようになるだろう。」

荻野丹後は、さっそくお地蔵様のそばにあったイチョウの根をけずり、奥方に飲ませました。するとお地蔵様のお告げ通り、奥方は乳がたくさん出るようになり、赤ん坊も元気に育ったということです。このうわさを聞いて、大勢の人がお参りし、イチョウの根をけずってゆくようになりました。

酒梨のイチョウも、梶原の大イチョウも、村の人たちに守られて、現在も青々とした葉をしげらせています。

紀行「神出鬼没　～謎の法道仙人～」

法道仙人

法道仙人（ほうどうせんにん）はインド出身だということになっている。鉄の宝鉢を持っていたことから、空鉢仙人（からはちせんにん）とも呼ばれ、不思議な術を使う超能力の持ち主であった。

いろいろな寺の縁起などによると、推古天皇（すいこてんのう）のころに日本へ渡ってきたとされているから、6～7世紀の人物ということになるが、本当の事跡や没年、墓所などすべて不明で、伝わっているのはその名前と仙術にまつわる伝説ばかりである。つまり幻のような人なのである。むしろ実在かどうかさえわからない。第一、なぜ彼は「法道上人」や「僧法道」ではなく、「仙人」なのだろうか。

播磨国（はりまのくに）の山には、法道仙人を開山・開基と伝える寺が多い。ちょっと数えただけで十や二十は挙げられるだろう。実際、彼が開いたと伝える寺院は、県下に110か所以上あるという。また、彼が日本に渡るときに、共に渡ってきた「牛頭天王（ごずてんのう）」は、姫路市の広峰神社（ひろみねじんじゃ）に祭られ、その後、八坂神社（やさかじんじゃ）中の座に祭られたとされているから、播磨国がとりわけ仙人と関わりが深いことは間違いない。

伽藍（がらん）を構えた寺院だけでなく、あちこちにある不可思議な自然物が、法道仙人と結びつけて理解され伝えられていることは、仙人に対する素朴な信仰がこの地の人々にとっても身近であったことを示している。3

法華山一乗寺

日本真景
播磨･垂水名所図帖

その伝説の始まりは、法華山一乗寺（ほっけさんいちじょうじ）であった。法道仙人が日本にやってきたとき、最初に発見した「霊地」が一乗寺背後の法華山であり、寺伝では孝徳天皇（こうとくてんのう）の勅願により、650年に開基されたということになっている。だとすると、まさしく法道仙人来日後間もない時期ということになる。

法華山は、「八葉蓮華（はちようれんげ）の形をした霊山」と言われる。山頂は標高243mほどと、さして高くない山であるが、地図で見るとなるほど、谷が複雑に入り込んで、「八葉」に見えないこともない。もっと特徴的なのは、この山がまわりを満願寺川（まんがんじがわ）や法華山谷川（ほっけさんたにがわ）などの河川に囲まれ、周囲のどの山ともつながっていないということである。山中にありながら独立した山塊。そして入りくんだ谷。こんな景観が、「八葉蓮華」と称される元だったのだろう。

播州名所巡覧図絵

それにしても「八葉」の形は、空からでなくてはわからないと思うのだが、やはり仙人は、空を飛んだのだろうか。

一乗寺（参道）

一乗寺へはバスの便もあるし、加古川市（かこがわし）や加西市（かさいし）側からの道も、充分に整備されている。バス停から北へのびる整備された参道を歩くと、すぐに、常緑樹のトンネルに覆われた階段がある。そこを登ると、常行堂がある広場になる。常行堂は聖武天皇の勅願で建てられたとされるが、何度か焼失して、現在の建物は明治時代に再建されたものである。

一乗寺（三重の塔）

そこから、少し急な第二の階段を登ると、国宝三重の塔へと導かれる。平安時代末に建てられた塔は、ゆったりとした安定感がある優美なもので、平安から中世建築への移行期の姿をよくとどめている。

本堂や開山堂（かいさんどう）へはさらに階段を登るのだが、取材時（2006年）は本堂が改修工事中のため、立ち入ることができないのは残念であった。秘仏を祭る本堂や、さらに奥にある開山堂は、森閑とした山岳寺院の雰囲気をたたえていて、厳粛な気持ちにさせられる場所である。2007年には工事も完了するということなので、再会の日を楽しみに待つことにしたい。

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

■古法華の石仏

古法華石仏

この一乗寺が創建された当時は、さらに北の笠松山（かさまつやま））のふもとにあったようだ。その場所ははっきりしないが、ふもとの古法華自然公園内には、7世紀後半に作られた古法華石仏（重要文化財）があることからも、この山の周辺に飛鳥～奈良時代の寺院があったことは確かだとされている。里山の自然を残すこの公園は、散策路も整備され、秋の紅葉の美しさは格別である。

投松

一乗寺からそう遠くない加古川市志方町の大澤には、「法道仙人の投げ松（なげまつ）」が祭られている。県道高砂北条線を北上して、投松（こちらは「ねじまつ」と読む）の交差点を過ぎ、山陽道をくぐったすぐの所を右折すると、村を通り過ぎた所にお堂があって、その中に「投げ松」が鎮座している。

投げ松

「投げ松」は、枯木である。が、どう見ても奇妙な松だ。幹も枝もうねうねと曲がりくねっている。曲がりすぎて、蛇のとぐろのようになった部分もある。この木が生きていたときには、ずいぶん奇妙に見えただろう。伝説では、法道仙人が放り投げた松ということになっているが、なるほどこのねじ曲がった幹や枝の理由を、放り投げられたせいにしたわけだ。

それにしてもかなりの巨木であったらしい。これほど曲がりくねったのは、この木だけが持つ性質だろうか。かなり以前に枯れたようだが、今も枝の断面から松やにが流れているのは驚きである。

法道仙人の手形石

札馬神社

法道仙人の手形石

法道仙人の手形石は、投げ松から少し県道を戻った、札馬神社（さつまじんじゃ）の境内にある。この神社は山陽道建設のために現在の場所へ移転したが、その際に手形石も移されたようだ。

本殿前に無造作に置かれた石の一部に、まるでヒトデのような形の「手形」が彫り込まれている。石自体は凝灰岩の板石で、見たところどうやら古墳から掘り出した石棺のふたのようである。石棺にこんな彫り込みがされることはないから、後世のだれかが彫ったのだろうけれど、その目的がわからない。

手形？

手形石や投げ松の近くには、法道仙人が乗ってきた馬のひづめ跡や、法道仙人の石船などという物もあるそうだから、探してみるのもいいかもしれない。さらに南に下ると、法道仙人の鉢を招いて供物をささげたという、生石（おおしこ）の大神が祭られた生石神社（おうしこじんじゃ）もある。昔の人が残してくれた謎は、大抵迷宮入りであるが、空想の楽しさを与えてくれることは確かだ。

生石神社

日本真景
播磨・垂水名所図帖

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

米塚堂

高砂市（たかさごし）の米田町米田（よねだちょうよねだ）には、法道仙人が飛ばした米俵が墜ちたという場所に、米塚堂が建てられている。米田天神社（よねだてんじんじゃ）から少し南へ下った場所、「宮本武蔵生誕地」という巨大な石碑の近くにある、米塚と書かれた小さな堂と傍にある伝承を記した碑が、法道仙人の名残である。

武蔵生誕の地の石碑

米塚堂

米塚堂の碑

鴨神社と梶原の大銀杏

舞鶴道（まいづるどう）を北上して、丹波第一トンネルを抜けると、視界が一気に開けて氷上低地（ひかみていち）が一望できる。春日インターチェンジから出て、国道175号線をさらに北上すると、正面に見える鉢を伏せたようななだらかな山が小富士山（こふじさん）で、梶原（かじわら）の村はこの山の北側にある。

梶原の村はずれにある鴨神社（かもじんじゃ）は、10世紀に編集された延喜式（えんぎしき）に記録のある古い神社である。高い木が茂る神社の本殿から少し離れた、一の鳥居のわきに、大きなイチョウの木が立っている。

梶原の大銀杏

イチョウの木

イチョウの木と
鴨神社一の鳥居

本によっては樹齢1500年と書かれているが、イチョウは中国が原産地で、日本に伝わってきたのは奈良時代のこととされているから、この数字は少し大きすぎるように思う。幹周りが5.8mと周囲を圧倒する巨樹だが、その長寿のせいで傷みも激しく、大規模な治療が施されたとのことで、その治療のあとが痛々しい。けれども村の人たちに守られた木は、これからも静かに歴史を刻んでゆくことだろう。伝説もまた、この木とともに生き続けるに違いない。

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

用語解説

【仙人】せんにん

中国の神仙思想や道教の理想とする人間像。人間界を離れて山の中に住み、不老不死の法を修め、神通力を得てさまざまな術を有する人。また仏教では、世俗を離れて山林に住み、神通力をもつ修行者のことを指す。仏を最高の仙人という意味で、「大仙」、「金仙」ということがある。

【法道仙人】ほうどうせんにん

法華山一乗寺を開いたとされる、伝説上の仙人。他にも数多くの、近畿地方の山岳寺院を開いたとされる。法道仙人についての最も古い記録は、兵庫県加東市にある御嶽山清水寺に伝わる1181年のものである。

伝説によれば、法道仙人は天竺（てんじく＝インド）の霊鷲山（りょうじゅせん）に住む五百侍明仙の一人で、孝徳天皇のころ、紫雲に乗って日本に渡り、法華山一乗寺（ほっけさんいちじょうじ）を開いたという。千手大悲銅像（千手観音）と仏舎利（ぶっしゃり）、宝鉢を持って常に法華経を誦し、また、その鉢を里へ飛ばしては供物を受けたので、空鉢仙人とも呼ばれたとされる。室町時代初期に著された『峰相記（みねあいき）』には、播磨において法道仙人が開いた寺として、20か寺があげられている。

【峰相記】みねあいき

1348年ごろに著された中世前期の播磨地方の地誌。著者は不明である。播磨国峯相山鶏足寺（ぶしょうざんけいそくじ）に参詣した僧侶と、そこに住む老僧の問答形式で著されている。日本の仏教の教義にはじまり、播磨の霊場の縁起、各地の世情や地誌などが記されている。安倍晴明（あべのせいめい）と芦屋道満（あしやどうまん）の逸話、福泊築港、悪党蜂起の記述など、鎌倉時代末の播磨地域を知る上で重要な記録となっている。最古の写本は、太子町斑鳩寺（はんきゅうじ）に伝わる1511年の年記をもつもの。

【法華経】ほけきょう

妙法蓮華経の略称。釈迦の耆闍崛山（ぎしゃくつせん）における8年間の説法を集めたものとされる。この経典の霊験功徳は、どのような障害も克服できると信じられている。日本では606年に聖徳太子が講経して以来重視され、諸国に法華滅罪の寺（国分尼寺）が建立された。天台宗、日蓮宗などが、この経典を根本として成立。

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

【法華山一乗寺】ほっけさんいちじょうじ

兵庫県加西市にある天台宗の寺院。西国三十三箇所第26番、および播磨西国三十三箇所第33番札所である。山号は法華山、本尊は銅造聖観音立像。

開基は法道仙人とされる。寺伝によれば法道仙人は、大化5（649）年に孝徳天皇に召されてその病気平癒を祈ったが、その霊験があったため、翌年天皇の勅願により堂宇が建立されたという。

この説話が史実であるとは考えにくいが、本尊の銅造聖観音立像は白鳳期の作とされるため、寺の開基もこの時期だと言われている。北方2.5㎞の笠松山山麓には、「古法華（ふるぼっけ）」の地名が残り、白鳳期の石仏も現存するため、一乗寺は本来この付近にあったと言われている。現在の位置に移った年代は、現存最古の建造物である三重塔（1171年建立）以前であろう。

1523年には、兵火によって堂宇を焼失したが、1562年に赤松義祐により再興。さらに火災を受けるが、1628年に姫路城主本多忠政の援助で本堂などが復興した。

国宝に指定されている三重塔は、この形式のものとしては日本国内屈指の古塔である。

下記のような国宝、重要文化財のほか、県指定文化財多数。

国宝：三重塔・聖徳太子及天台高僧画像

重要文化財：金堂（本堂）・護法堂・弁天堂・阿弥陀如来五尊画像・五大力吼画像・聖観世音菩薩立像・ 木造法道仙人像・僧形座像・石造五輪塔

【古法華石仏】ふるぼっけせきぶつ

加西市西長町古法華に所在する、白鳳期（7世紀後半）の石仏。浮彫如来像および両脇侍（わきじ）が、この地域に産する流紋岩質溶結凝灰岩に刻まれており、日本の石仏中、最も古いものの一つとされる。過去に火災に遭っており、一部が剥落している。

縦102㎝、横72㎝、厚さ20㎝の板石の表面に、高さ46㎝の中尊と、蓮華座上に立つ脇侍を半肉彫りとし、中尊の上に天蓋、脇侍の上に三重の塔を刻んでいる。

この三尊石仏上が、錣（しころ）葺きの屋根をかたどった石造の屋蓋に覆われていることから、これらは三尊石仏を奥壁とする石造厨子（ずし）として作られたと考えられており、その形式は法隆寺の玉虫厨子を想起させるという。1951年国指定重要文化財。

【石棺】せっかん

埋葬する遺体を納めるために作られた、石製の棺。石を組み合わせて作る場合と、一個の石をくりぬいて作る場合がある。日本での最古の例は縄文時代後期にさかのぼる。

古墳時代には、古墳に埋葬するためのさまざまな形式の石棺が製作された。その主要なものには、割竹形石棺、舟形石棺（ともに古墳時代前期）、長持形石棺（中期）、家形石棺（後期）がある。

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

【生石神社・石の宝殿】おうしこじんじゃ（「おおしこ」とも表記することがある）・いしのほうでん

『生石神社略記』によれば、崇神天皇（すじんてんのう）の代に創建したとされ、背後の宝殿山山腹にある石の宝殿を神体として祭る。

石の宝殿については、オオナムチの神とスクナヒコナの神が、出雲からこの地に来た際に、国土を鎮めるため、夜の間に石の宮殿を造営しようとしたが、阿賀の神の反乱を受けて造営が間に合わなかったという伝承（『生石神社略記』）、聖徳太子の時代に弓削大連（ゆげのおおむらじ＝物部守屋）が造ったという『播磨国風土記』の伝承などがある。古墳時代終末期の石棺や横口式石槨（せきかく）などとの関係を指摘する説、石棺の未製品とする説、火葬骨の骨蔵器外容器とする説、供養堂とする説などがあるが、製作年代については、7世紀代と考える人が多いようである。

【イチョウ】いちょう

銀杏、公孫樹とも表記する。学名は*Ginkgo biloba*。

裸子植物イチョウ科に属するイチョウ類の中で、唯一の現存している種である。近縁の化石種は古生代から知られており、中生代のジュラ紀には世界的に分布していたが、現生のイチョウを除き、他の種はすべて絶滅した。広葉樹のように思われがちだが、針葉樹の仲間である。雌雄異株であるため、実は雌木にのみなる。

イチョウの語源は、葉がカモの足に似ることから、中国語で鴨をさす「ヤーチャウ」がなまったとされる。

実は銀杏（ぎんなん）と呼ばれ食用となるが、皮膚に触れるとかぶれなどを引き起こすことがある。また、食用とする種子の中には、神経伝達物質の生合成を阻害する成分が含まれ、けいれんなどを引き起こす恐れがあり、特に子供の場合には要注意とされる。大人の場合、1日あたりの摂食の目安は4粒程度とされるが、その一方で咳を鎮める効果があり、薬草として用いられることもある。

現在日本で見られるイチョウは、中国で生き残ったものが持ち込まれたもので、その時期は平安時代後期～鎌倉時代とされている。ヨーロッパには17世紀に持ち込まれ、現在では世界各地で栽培されている。

イチョウは大木となるが、大木では枝から垂れ下がった円錐形の突起を生じる場合があり、乳イチョウなどと呼ばれる。「乳が出るようになる」といった伝説も、こうしたところから生まれたのだろう。

【孝徳天皇】こうとくてんのう

第36代の天皇（596？～654）。在位は645～654年。大化の改新による蘇我氏本家滅亡をうけて即位した。皇太子は中大兄皇子で、実質的権力は中大兄皇子が握っていたとされる。難波長柄豊碕宮遷都などをおこなったが、中大兄皇子は天皇の意に反して、皇后や百官を率いて大和飛鳥へ戻り、取り残されたまま難波宮で病死した。

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

【黒井城】くろいじょう

丹波市春日町と市島町の境にある、猪ノ口山（365m）山頂にある城。足利尊氏の北条攻めに加わった赤松貞範が、その功績によって春日町周辺を領有して築城した。

西曲輪（くるわ）、本丸、二の丸、三の丸、東曲輪が並ぶ連郭式の山城で、東西170m、南北40mを測る。周囲9kmにわたる山地には、出城や館なども残る。

赤松氏の後、赤井氏、荻野氏が領有した。天文23（1554）年に城主となった荻野直正（悪右衛門）は、勇将とうたわれ、丹後、但馬へも勢力を伸ばしたが、明智光秀に攻められ、4年間にわたる戦いの後に落城した。その後、光秀の城代として斉藤利三が入った際、この地で生まれた娘が、後に徳川家光の乳母となった春日の局（かすがのつぼね）である。1989年、国指定史跡。

【明智光秀】あけちみつひで

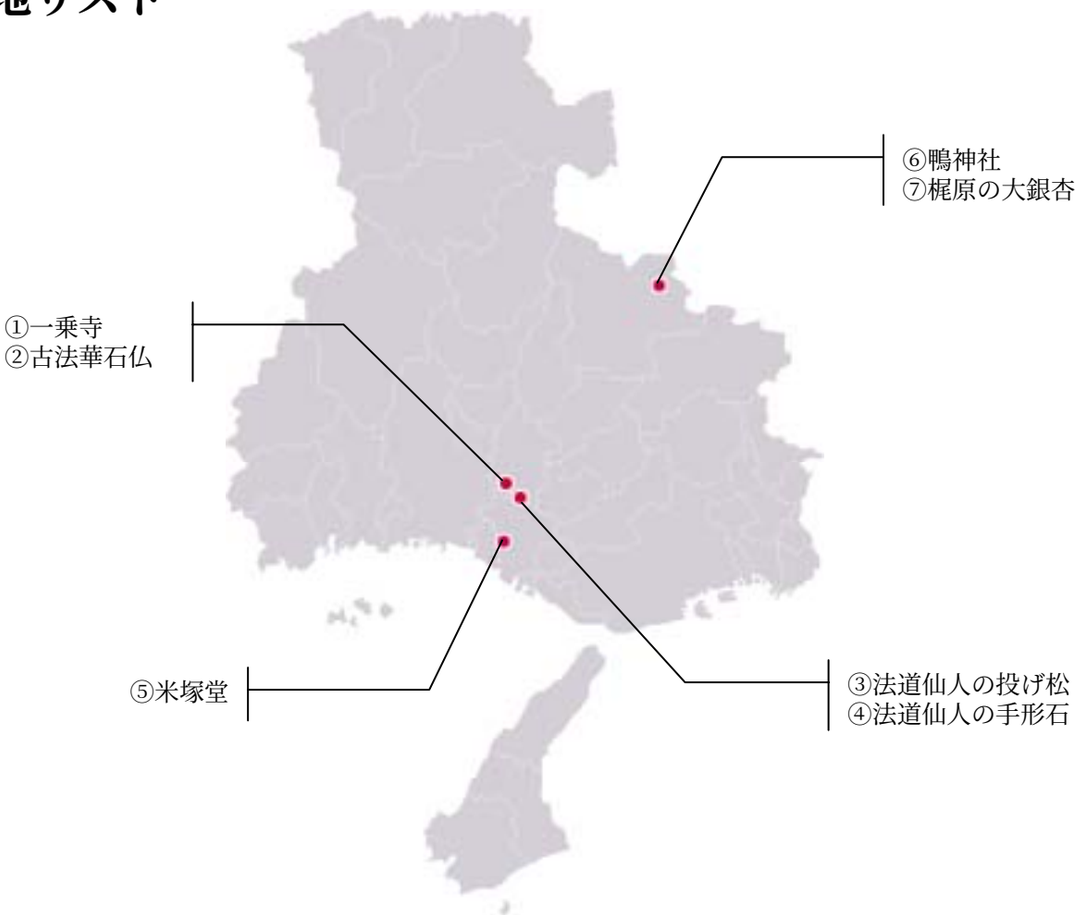
戦国時代末～安土桃山時代の武将（1528？～1582）。美濃国守護の土岐氏（ときし）の一族とされるが、詳細は不明。織田信長に仕え、足利義昭の将軍擁立に関与した。信長の上洛後は、京都の公家・寺社などとの交渉役として活躍し、1571年には近江坂本城主となった。1575年から、信長による中国攻略にともなって丹波へ侵攻してこれを攻略。丹波一国の支配を認められた。1582年、京都の本願寺で信長を殺害したが、その11日後には羽柴秀吉と京都の山崎で戦って敗れ、敗走中に山城国小栗栖（おぐるす）で農民に殺害された。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	丹波のむかしばなし第4集	2001	丹波のむかしばなし編集委員会	㈶丹波の森協会
	はりま伝説散歩	2002	橘川真一	神戸新聞総合出版センター
歴史･文化等	日本古典文学大系2　播磨国風土記	1958	秋本吉郎　校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典（上･下）	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	日本の古代遺跡3　兵庫南部	1984	櫃本誠一･松下勝	保育社
	はりま伝説散歩	2002	橘川真一	神戸新聞総合出版センター
その他	拝観のしおり ※参拝者用資料	不詳	一乗寺	一乗寺
	史蹟播磨國石乃寶殿生石神社略記 ※参拝者用資料	不詳	生石神社	生石神社
	日本三奇　史跡石乃宝殿　生石神社 ※参拝者用資料	不詳	生石神社	生石神社
	播磨古法華石佛 ※参拝者用資料	不詳	古法華石仏保存委員会	古法華石仏保存委員会

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.

所在地リスト



①一乗寺	加西市坂本町821-17
②古法華石仏	加西市西長町字古法華
③法道仙人の投げ松	加古川市志方町大澤　投松
④法道仙人の手形石	加古川市志方町大澤　札馬
⑤米塚堂	高砂市米田町米田
⑥鴨神社	丹波市市島町梶原字カモ440
⑦梶原の大銀杏	丹波市市島町梶原

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行
http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/
編集発行　兵庫県立歴史博物館
〒670-0012　兵庫県姫路市本町６８　℡ 0792-88-9011
第1刷　2007年4月1日

Copyright (C) Hyogo Prefectural Museum of History. All Rights Reserved.